

3) 眼科定点把握疾患

●急性出血性結膜炎

平成27年の急性出血性結膜炎の報告数は、42例で前年より15例増加し、一定点眼科医療機関あたり0.02であった。

週別発生状況では、府内合計で定点あたり最高が、第8週の0.06(3例)で、次いで、第13週、第14週、第18週、第20週、第31週、第32週、第43週、第44週、第45週、第51週、第53週が0.04(2例)であった。報告の無い週が24週あった。

年間平均ブロック別では、⑧大阪市北部の0.04が最も高く、④中河内、⑦泉州の0.03がこれに続いた。②三島からの報告はなかった。

年齢別では、本疾患も流行性角結膜炎と同様に例年成人の発生が多く、20歳以上の報告数が35例と、全体の83.3%を占めた。

本年の大阪府内の報告数は、定点当たりで全国情報より高かった。これは、平成12年以降のことである。ちなみに平成12年の全国報告数は定点当たり0.04、大阪府内は0.10であった。

最近5年間の一眼科定点あたりの急性出血性結膜炎発生例件数

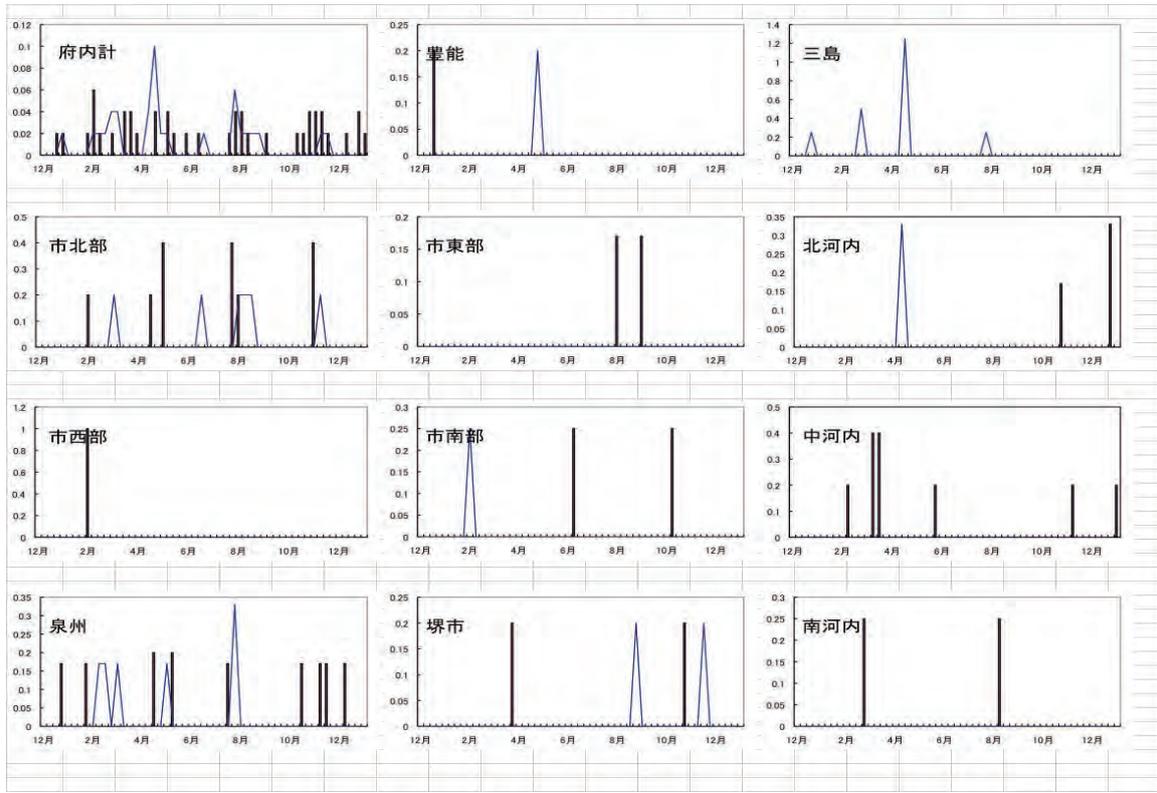
	平成23年	平成24年	平成25年	平成26年	平成27年
大阪	0.01	0.01	0.01	0.01	0.02
全国	0.13	0.01	0.02	0.01	0.01

(文責：笹部)

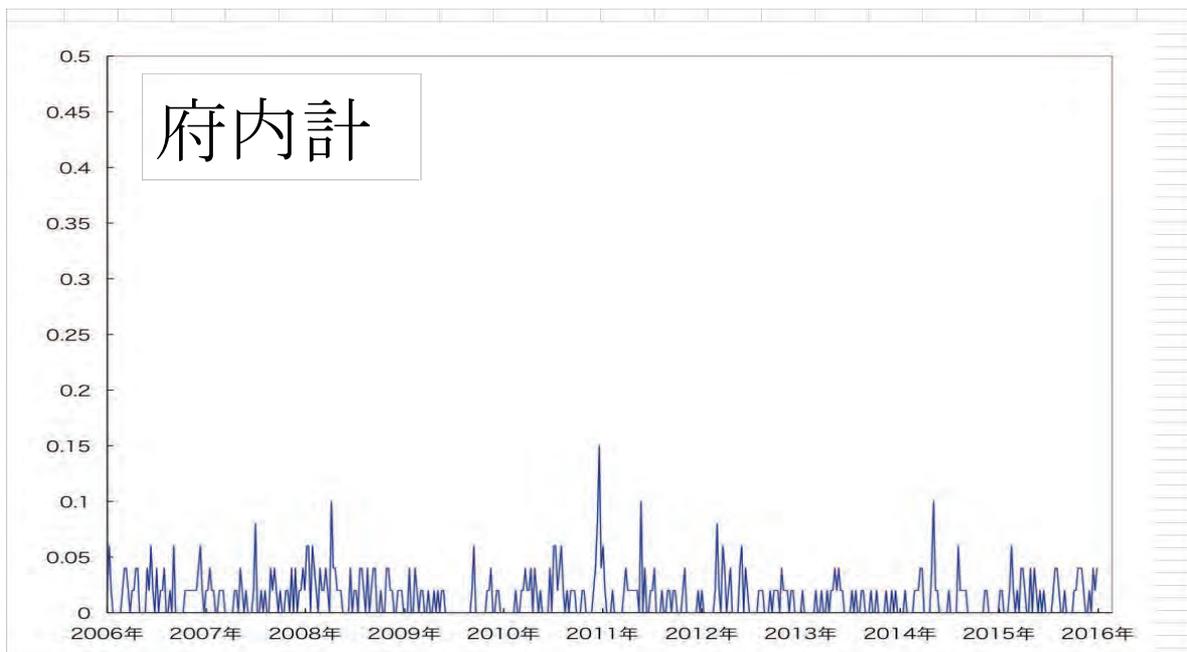
急性出血性結膜炎

線（H26年第1週～第52週）

棒（H27年第1週～第53週）



線（H18年第1週～H27年第53週）



●流行性角結膜炎

平成27年の流行性角結膜炎の報告数は前年の38.9%増の1053例で、一定点眼科医療機関あたり0.38であった。

週別発生状況では、府内合計で最も報告数の多かったのは、第34週の定点あたり0.85で、第36週の0.77がこれに続き、以下、第31週が0.73、第35週、第37週、第38週が0.67であった。本疾患は夏型感染症とされており、発生件が多いとその傾向は顕著になる。本年は、第28週から第40週までの（7月～9月）13週に全体の36%の報告があった。

週別ブロック別では、⑦泉州第31週の3.33が最も高く、同じく⑦泉州第30週の2.67、第34週の2.50、第38週の2.33、⑥堺市第22週の2.20と続いた。

年間平均ブロック別では、⑦泉州が0.87と第1位で、次いで⑪大阪市南部0.61、②三島0.47、⑥堺市0.43の順であった。最低は、③北河内の0.17であった。

年齢別では、例年どおり成人（20才以上）の発生件数が多く、本年も734例と全体の69.7%を占めた。

本年も、大阪府内の定点あたりの報告数は、全国集計よりも低かった。

最近5年間の一眼科定点あたり流行性角結膜炎発生例数

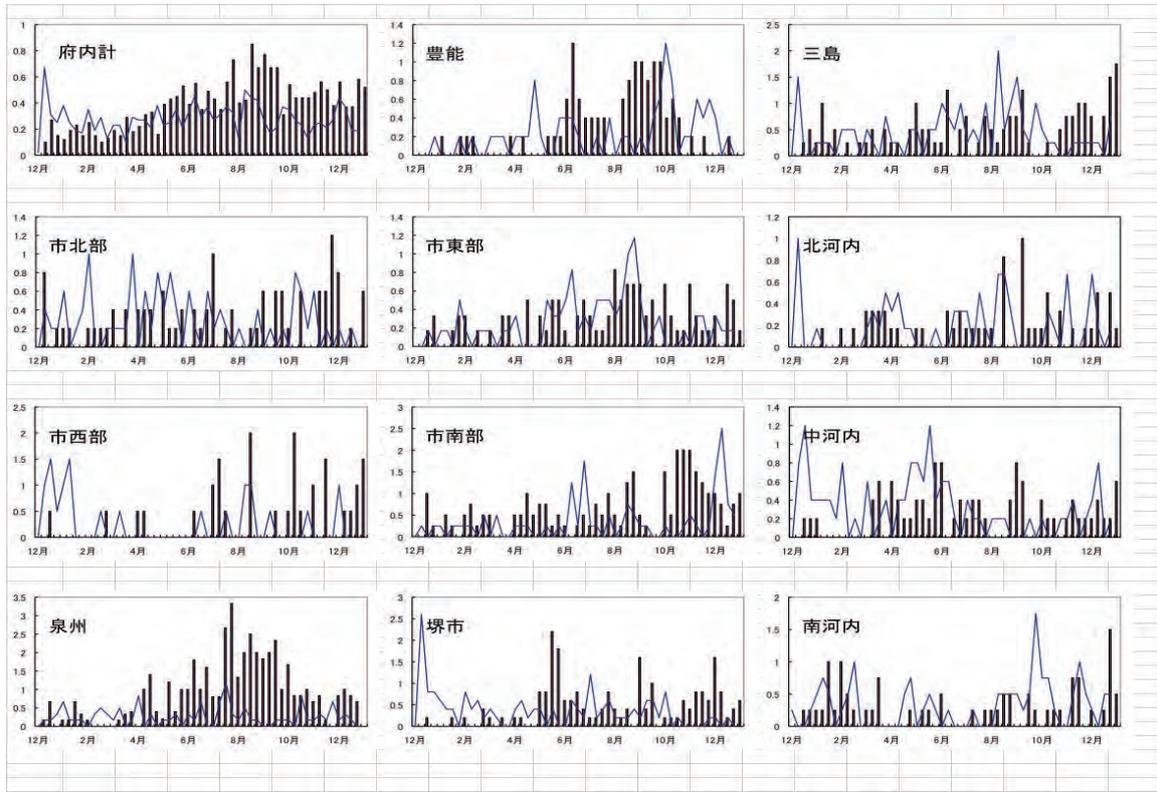
	平成23年	平成24年	平成25年	平成26年	平成27年
大阪府	0.30	0.23	0.36	0.28	0.38
全国	0.60	0.56	0.58	0.57	0.69

(文責：笹部)

流行性角結膜炎

線 (H26年第1週～第52週)

棒 (H27年第1週～第53週)



線 (H18年第1週～H27年第53週)

